九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

20世紀初頭における日本のエスペラント運動 : 国際連帯をめざして

譚, 謎

https://doi.org/10.15017/1470222

出版情報：地球社会統合科学研究. 1, pp.29-42, 2014-09-10. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』創刊号（2014）29～42
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.1（2014），pp. 29～42

20世紀初頭における日本のエスペラント運動
―国際連帯をめざして―

譚（タン）　謎（メイ）

Ⅰ．はじめに

エスペラントは、1887年、ロシア領ポーランドに在住したユダヤ人ザメンホフ(Lazaro Ludviko Zamenhof, 1859.12.15―1917.4.14)[1]が発表した16ヵ条の文法からなる平易な人工言語である。もともとの意味は「希望するもの」であり、「諸民族の内的生活に干渉せず、現存の民族言語の排除を目的にすることも決してなく、民族を異にする人々に相互理解を可能」にする中立的言語であると言われてきた。しかし、現実には「使いようによって、戦争のためにも、平和のためにも使われる」両義的性格を持っていたと評価されることもある[2]。それは、エスペラントが国際共通語というインターナショナリズムの性格を持ちながらも、しかし、その前提として「民族」の尊重というナショナリズムの性格も抱え込んでいた特質に由来するのではないか。すなわち、エスペラントはもともと、「民族」問題との緊張をはらんでいたのである。

当時のポーランドでは、帝政ロシアのような支配する立場と、ポーランド人、さらにはユダヤ人としてのザメンホフのような被圧迫民族の立場との対立が存在していた。このような状況の下で、ザメンホフは、民族的排外主義に抗議しつつ、共通語を通じて諸民族間の相互理解を目的としたエスペラントを作り出したのである。

20世紀に入り、エスペラントの息吹が日本にも届き始めた。最初は個人的な学習が中心であったが、1906年には、日本最初のエスペラント組織「日本エスペラント協会」が設立される。日露戦争後の日本で国際社会との結びつきが急速に拡大するなか、知識人たちの一部は、日本の国民的使命を自ら引き受け、西洋の新思想や商業を日本に輸入することに努め、さらには日本の対外的自己表現をめざして、国際語としてのエスペラントに関心を払うようになったのである。第一次大戦後の国際協調の時代に入ると、インテリだけではなく一般の大衆もエスペラント運動に巻き込んでエスペラントを通じた国際連帯が模索された。ここでいう国際連帯とは、政治的立場はさまざまあれども、エスペラントを媒介として試みられる国境を越えた連帯活動を広く指す。こうした状況のなかで、社会の様々な矛盾を解決しようとする人々が積極的にエスペラント運動に加わった。そのため、エスペランティストには多様な思想が流れ込んできたのである。

日本エスペラント運動に関する従来の研究では、おおむね、エスペラント運動の関係者によるものが中心であり、そこには、大きくは3つの傾向がみられる。まず1つ目は、運動史的視点からエスペラント運動の通史を記述する傾向である。たとえば、その代表的な研究としては、大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』（1987年）、初芝武美『日本エスペラント運動史』（1998年）、③ウルリッヒ・リンス著・栗栖継訳『危険な言語―迫害のなかのエスペラント―』（1975年）があげられる[3]。表題に示されるように、大島・宮本、初芝の研究は、1900年代初頭から戦後にかけての日本エスペラント運動に関して各種の事実を記したものである。また、ウルリッヒの研究は、エスペラントの普及だけではなく、運動関係者への迫害にも注目し、東アジアにおけるエスペラント運動弾圧の歴史について触れている。

2つ目は、社会言語学の領域におけるエスペラント語の発展と「エスペラント採用論」を検討する研究方法である。①田中克彦『エスペラント―異端の言語』（2007年）、②山本真弓[編著]・臼井裕之・木村護郎クリストフ『言語的近代を超えて：＜多言語状況＞を生きるために』(2004年)、③臼井裕之「北一輝の＜エスペラント採用論＞に見る近代日本の＜英語問題＞＜国語問題＞」（2007年）などがあげられる[4]。田中の研究は、エスペラントの構造と特性、受容と反発の歴史を解明した研究として有意義である。また山本・臼井・木村の研究では、多言語社会であったかつての日本帝国におけるエスペラントの位置づけを論じつつ、とりわけ、北一輝によるエスペラントの「第二国語」化説についても言及している。

3つ目は、日本エスペラント学会が指導する普及運動とプロレタリア・エスペラント運動を分析する視点である。①ユンジョン「1930年代の日本のエスペラント運動と国際関係」（2009年）、②三宅栄治『闘うエスペランチ

ストの軌跡―プロレタリア・エスペラント運動の研究』(1995年)。③竹内次郎「プロレタリア、エスペラント運動について」(1978年)などがあげられる[5]。

本稿はこれらの先行研究から大いに学んでいる。しかし、上記の研究では、日本におけるエスペラント受容のプロセスが、概観的な説明にとどまっており、国内外の社会変動と密接に関連付けて、知識人によるエスペラント接近の動機や目的が具体的に分析されているわけではないように思われる。また、個々のエスペラント運動に関する研究はあるものの、1920年代初頭にさまざまに展開された国際連帯をめざすエスペランティストの運動を幅広く見通した考察が十分になされているとは言えない。本稿では、これまでの先行研究をまとめ、それらをふまえて、第一次大戦後の様々な思想的立場に立つ人々に着目し、日本エスペラント運動を三つの潮流に分けて検討する。もともと、日本エスペラント協会が改変されてできた日本エスペラント学会も一つの潮流を構成していると考えられるが、1920年代初頭にその内部でエスペラント主義をめぐる激しい対立が存在し、一つのまとまった集団として取り扱うのが困難なためここでは取り上げていない。

日本エスペラント運動の初期段階で、知識人たちが中心となってエスペラントに関心を抱き、その普及を進めたことと日本国内の社会状況の変化や国際社会の変動とは、どのような関係があったのだろうか。彼らは、自身の運動目的のためにエスペラントをどのような形で政治的に利用しようとしたのだろうか。さらに、第一次世界大戦を経て「五大国」の一つとなり「帝国」化した日本において、エスペランティストたちが社会主義の高揚や民族自決主義の台頭という国際政治的背景の下で、エスペラント運動を通じた国際連帯をどのように図ろうとしていたのだろうか。

本稿では以上の論点を前提にして、日露戦争直後から1920年代半ばに至る時期の日本のエスペラント運動について、国内社会の動きや国際社会の情勢と関連づけながら、運動が広がりを見せた理由やその背景を探る。この作業を通じて、エスペラントに注目した人々の国際連帯活動及び彼らの思想の一端を考察することにしたい。この作業は、20世紀初期に見られたグローバリゼーションの渦中における日本の多様な国際連帯を再認識する一助となろう。

Ⅱ．日露戦争前後日本におけるエスペラントの受容

ⅰ．国際語の必要性

周知の通り日露戦争に勝利した日本は、イギリス・ロシアとの協調を外交政策の軸に据え、欧米諸国との対等な国際関係を作り上げようとしていた。そのことは、国際的なコミュニケーションを必要とする場面の増加を意味してもいた。国際的な舞台ではどの国の言語を採用することになるのかという問題に対する不安を持つ者や、民族間の差別等を克服するための世界共通語の必要性を痛感する者もいた。さらに、日露戦争期には、日本国内において漢文学などの古典的な教養・文化に代わって、西洋文化が定着しつつあったこともあり、インテリ層にとって国際語の必要性はいよいよ急を告げていた。

既に国際語に関しては、1887年頃日本においてヴォラピュク(Volapük)[6]学習熱が高まっていた。しかし欧州においては、1889年第3回ヴォラピュク世界大会を契機に起こった内部紛争のため、ヴォラピュク普及運動はすでに瓦解していた。それとともに、日本におけるヴォラピュク学習熱もまた、人工国際語なるものに対する不信を残して一挙に消滅してしまった[7]。

新文明の吸収に努める当時の日本において、熱心にエスペラントを研究する者がいたのは当然であった。とりわけ、日露戦争の勝利によって、日本が国際的な舞台に華々しくデビューし、国民の目も海外に向き、国際化の傾向が益々増進した状況がエスペラントへの関心を高める一因となった。国際的な舞台にかけのぼるうえで大きな障害となったものの一つは、各国間又は各民族間における言語の相違であった。したがって、各国民・各民族間の言語障害をなくす「中立言語」である国際補助語としてのエスペラントに関心が向けられたのである。その頃の日本にあって、とくにエスペラントに関心を持ったのは、教育者・英学者・新聞記者等であった[8]。1906年8月、日本エスペラント協会は機関誌第1号を発行したが、そのなかでは次のように述べられていた。

「…従来学術の普及、商業上の取引、その他すべての世界的関係の事業において国語の相違より感じたる一切の不便は、エスペラントの普及により全然一掃せらるべく、かつ世界各国の人民がこれによりて最も便利にかつ最も親密なる交際をなし得るの日近きにあるは吾人の固く信ずる処なり。殊に我が日本の如き新進勃興の邦国に在りては、今後益々進んで学術其他百般の事業を世界に紹介すべきもの多かるべく、また欧米各国の学者政治家若しくは実業家等の我が国に遊ぶもの日に加わり来れるを見れば、この至便にして完全なる国際語エスペラントを採用し之が普及を図るは、豈に今日の急務にあらずや。」[9]

すなわち、日本の国際社会との結びつきの急速な拡大のなかで、学術や商業、政治外交等の分野において、相互理解や意思疎通を果たすための国際共通語が必要であるとの認識が広まった。言語(国語)上の障害が意識さ

れ、それを克服するために、エスペラントへの関心が高まったといえよう。つまり、初期のエスペランティストたちは、「学術の普及、商業上の取引、その他すべての世界的関係の事業」[10]における共通語の不在による不便を克服する手段として、エスペラントに関心を持ったわけである。しかし彼らは、こうしたエスペラントの実利的有用性を考えてはいたものの、エスペラントに本来込められていた「諸民族間の友愛と正義」という意味を充分に意識していたわけではなかった。エスペラントが習得しやすいという簡便さも手伝って、当時のインテリの間でエスペラント熱が盛り上がりはした。これらの人々は国内外の社会的変化や新しい時代の流れに敏感に反応しながら、エスペラントを通じて国際社会での言語生活における実利的問題を解決しようと考えたのであった。

ii．エスペラント流入の経路

エスペラントはいくつかのルートを経て日本に流入した。そのルートは、大きく三つに分けることができる[11]。それぞれについて、簡単に見ておくことにしよう。

① フランスルート

1893年に来日し、長崎の海星中学校物理化学教師となったフランス人ミスレル[12]（Alphonse　Mistler）は、熱心なエスペランティストであった兄の紹介でザメンホフと出会い、ザメンホフから強く勧誘されてエスペラントを学んでいた。1902年には長崎の英字新聞『Nagasaki Press』（11月26日号）にエスペラントの紹介記事を寄稿した。これは、日本でエスペラントに触れた最初の報道であったと言われている。この記事を見た歴史学者の黒板勝美[13]はエスペラントに興味を持ち、1903年に同紙の編集者に照会し、エスペラント学習書Ekzercaro[14]を求めて独学を始めた。そして、1905年3月、黒板の談話に基づいて平民社の堺利彦が週刊社会主義雑誌『直言』（第2巻第7号、1905年3月19日発行）に「エスペラント語の話」を掲載した[15]。この記事は一般の人に注目されることはなかったが、堺利彦、大杉栄、そして荒畑寒村など当時の一部の社会主義者の間に知られるようになった。

フランス留学から帰った教育者樋口勘次郎も『国家社会主義新教育学』（同文館、1904年）の第二十章において、世界語の必要性に言及し、エスペラントを紹介・推奨した。彼は、自身の著書のなかで、ヨーロッパにおけるエスペラントの普及並びにその利用情況を滞仏中の自らの見聞に基づき詳しく述べている。すなわち、樋口はフランスでのエスペラント熱を目のあたりにして、エスペラントの実利的有用性を確信し、日本における国語の統一問題を解決するために教育学者の間にエスペラントを広げようとした。

② イギリスルート

日本に最も大量にエスペラントが流入するのに寄与したのはイギリスの新聞・雑誌及び日本で発行された英字新聞・雑誌であったと言われている。ロンドンのReview　of Reviews社社主兼主筆で平和論者のステッド（William　T.　Stead）は、同誌上に毎月エスペラントの記事を掲載した。同誌は、書店の店頭にも並べられていたほど日本の知識階級に親しまれていた[16]。また、日本で発行された*Japan Mail*その他の英字新聞もイギリスの諸新聞と併行してエスペラントに関するニュースを載せるようになったのみならず、『英語青年』、『英文新誌』、『英学界』など数多くの英語雑誌が競って新国際語を紹介するに至り、英学者間にエスペラント熱を吹き込んだ[17]。そのため、日本エスペラント協会の創立者の過半数が英学者であり、その会員名簿中に多くの著名な英学者や英語教育家が名を連ねている。このようなイギリスを介したエスペラント流入の影響を受けた者としては、吉野作造、福田国太郎、安孫子貞次郎、武藤於菟、浅田栄次、高橋邦太郎などの名を挙げることができる[18]。

また、岡山第六高等学校の英語教師G.E.ガントレット（George Edward Luckman Gauntlett,1868－1956）についても言及する必要がある。彼は1903年頃エスペラントを学習し、その後学生にエスペラントを教え、さらに英文テキストによるエスペラントの通信教育も開始した。前後3回の通信講座で受講者が600余名に達したと言われている。1906年、ガントレットが通信講座受講者の名簿を黒板に送り、これを基にして日本エスペラント協会設立の相談会は開かれた。ガントレットは日本のエスペラント運動の先駆的恩人だと言えよう。

③ ロシアルート

日本でエスペラントが広まるようになったもう一つのルートは、1906年7月に二葉亭四迷が彩雲閣から発刊した『世界語』である[19]。『世界語』は日本最初のエスペラント教科書と見なされている。当時、二葉亭の『世界語』によりエスペラントを学び始めた者は多かった。『世界語』出版の経緯について、二葉亭はその例言の中で次のように述べている。

「余曾て事を以て露領浦潮に遊べる時、偶々交を同地のエスペラント協会々頭ポストニコフ氏と結び、始て氏より詳かに世界語の事を聞くを得たり、氏久しく日本語にて、其教科書を刊行せんの意あり、余に一臂の力を添

へんとを乞はる、余欣然として其意を領し、便ち氏に就きて略此新語の一斑を伝習し、又氏の率ゆるエスペラント協会に入会し、数々其集会に出席して、親しく会員の諸子の如何に熱心に之を研究しつつあるかを目撃したり、其後満州を経て北京に入り、故ありて留りて遂に日本に回らず、滞燕中ポ氏遥かに書を寄せて教科書翻訳の業未だ成らずるや否やを問はる、且つ曰く君が翻訳せらるべき事をワルシャーワのドクトル、ザメンホフに通報したるに、ドクトルは如何に悦びたりけん、其予告は勿ち最近の露国のエスペラント協会々報に出でたり、願くは速に業を卒へよと、当時余の身辺には俗務叢脞、往々徹睡らざることあり、まだ筆を執りて此閑事業に従ふ能はず、かくて36年の夏日露の関係漸く切迫せる頃、余の志望も遂に不成功に終わり、怏々として帰朝し、是より永く世と相謝して又時事を省せず、終日書斎中に兀坐して、茫然として我の我たるを忘るゝことあり、是に於てポ氏との契約を果さんことを思ひ、暇あるごとに筆を執りて今年今月翻訳の業漸く就る、此書即是也。」[20]

すなわち、二葉亭は短期間のウラジオストック滞在中にポストニコフの熱心な推奨によりエスペラントを習い、その教科書翻訳の仕事を引き受けて、さらに当地のエスペラント協会にも入会した。また、この教科書の原版については、「ポ氏が余に托せし教科書といふは、此書の発明者として有名なるドクトル、ザメンホフが自ら筆を援りて起草せし露文の教科書なり」[21]と述べている。すなわち、二葉亭が出版した『世界語』は、ロシア語版のエスペラント教科書から日本語版に翻訳されたものである。

二葉亭が自ら語るところによれば、『世界語』の出版はポストニコフとの約束を果たすためであった。しかしそれだけではなく、当時起こった日露戦争の結果が国民の目を海外に向けさせ、国際語への関心を高めたという時代背景も一因であったことが分る。二葉亭がエスペラントを学習した元々の動機はともかく、この最初の教科書が日本のエスペラント運動に与えた影響は相当に大きいと認めなければならない。

上記のように、エスペラントが日本へ流入した経路は三つのルート（即ちフランスルート、イギリスルート、ロシアルート）であると考えられている。エスペラントを日本の社会主義運動の普及と結び付けようとした堺のような立場がある一方、二葉亭四迷のような国権主義者的な立場もあった。ただし、日露戦争の時点においては、エスペラントを組織的に普及しようという動きは弱く、個人的な関心とそれに基づく学習にとどまっていた。また、当時エスペラントを推奨していた教育者、英学者、新聞記者らは、エスペラントを単なる便利な言葉或いは文字として取り扱う傾向が強かった。彼らは、決してエスペラントの内在的思想を考慮していたわけではなかったのである。すなわち、この当時、エスペラントが日本に受容されるにあたっては、言語障害の壁を乗り越えるという点が重視され、国際共通語を通じて諸民族間の不平等や差別、紛争などを無くすという意図は希薄であった。それは、日本のエスペランティストたちがザメンホフのような被圧迫民族の立場に置かれていたわけではなかったからだと思われる。

いずれにせよ、この時期の日本では、エスペラントは、思想的傾向がまったく異なる人々に受容されていった。日本における初期のエスペラントティストたちは、エスペラントを単なる言葉としてとらえ、もっぱら実用主義的な観点からエスペラントに接近したのであった。

ⅲ．難航するエスペラント運動

このような中、1906年、三つのルートを通じてエスペラントを受容したエスペランティストたちが合流し、日本における最初のエスペラント運動の組織、日本エスペラント協会が設立された。まず1906年5月に、横須賀に日本エスペラント協会―Nippon Esperanto Societo（以下NESと略記する）が立ち上がった。これは日本最初のエスペラント組織であるばかりでなく、地方におけるエスペラント組織の先駆けともなった。同年6月、東京で国史学者である黒板を中心に日本エスペラント協会―Japana Esperantista Asocio（以下JEAと略記する）が創立され、全国的なエスペラント運動の中央機関となった。こうして、日本におけるエスペラント運動は個人的な関心とそれに基づく学習の時代から、組織による普及の時代に入った。

日本エスペラント協会はエスペランティストたちの精神的な中央機関として発足し、それまで各地に散らばっていたエスペラントの学習者が組織化され、エスペラント普及活動が始まった。こうして、エスペラント運動は活発に展開されるように見えたが、はかない夢のように1907年11月に第2回協会大会が開かれた後、沈滞を余儀なくされた。当時、欧州では隆盛を迎えていたのに、日本の運動は急速に衰退した。日本におけるエスペラント運動の急速な衰退の背景を、初芝武美は次のように説明している。

「一つには協会の中心人物である黒板勝美が二年間の予定で欧米出張に旅立ち、実務面では千布利雄らが運動を支えたが、黒板に代わって運動を引っ張る強力な推進役がいなかったことである。また、エスペラントが宣伝されたほどにはやさしくもなく、その実用性の効果も思ったほどは上がらず一般学習者から飽きられたこ

と、さらに日露戦争後の不況の中で起こった赤旗事件（1908）や大逆事件（1910）などに見られる社会主義者への政府の弾圧政策が、エスペランチストと社会主義者とのイメージをダブらせて、エスペラントを学ぶことを躊躇させる雰囲気を醸し出したことも見逃せない」[22]。

すなわち、黒板の渡欧、エスペラントの実用性の不足、及び社会主義者との関係が初期エスペラント運動の衰退した原因であった。

たとえば、1908年4月から東京在住の中国革命党員や留学生を対象に大杉栄が講習会（週四回、出席20）を開き、なお夏に講習も開かれるはずのところ、6月赤旗事件により大杉・堺らが検挙され、エスペラント熱は下がっていった。

すでに1907年1月には、横須賀支部が、「例会に集まる人がなくなり、会費も集まらぬから支部を解散する。熱心な会員は本部（協会）の方へ入会替えをしてもらう」[23]と宣言し、エスペラント運動没落の先陣を切った。

日露戦争後、国際語の必要性や国際語への関心の高まりと結びついてエスペラントは日本に流入し、国際的な活動や事業に関心ある人々に希望を与えた。初期の運動を支持・指導した人々のエスペラントに対する好奇心は、エスペラントを普及させたいという共通の欲求に結びつき、日本エスペラント協会の創立に至った。しかし初期のエスペランティストたちは、国語の障害を克服する国際的言語としてのエスペラントを普及させようとしたものの、エスペラントの思想的な面を十分に理解していたわけではなかった。また、上に引用した初芝の指摘にあるように、エスペランティストたちの中には、保守主義者、自由主義者から社会主義者に至るまで、雑多な政治的立場の人々が含まれていた。このことが日本エスペラント協会の構成にも反映し、「異なる個々の意見の共存をゆるそうという傾向を示していたとすれば、社会主義者たちの熱心さ、保守派の危惧、そして政府側からくる弾圧の脅威は、こういう協調が長くつづくのに有利な条件ではなかった」[24]のである。また、エスペラントが単なる便利な言語に過ぎないと見なされていたこともあり、エスペラントの本来的精神は表層的にしか受容されなかった。さらに日露戦争後の経済的窮乏や国内社会の不安定なども影響し、エスペラント普及運動が急速に衰退に向ったと言えよう。その意味からすれば、戦前日本のエスペラント運動の基盤は、脆弱であったと言えよう。ゆえに、1906年から本格的に始まった日本エスペラント運動は、国際的連帯をも志向したものの、現実には一時的な流行にとどまった。

Ⅲ．第一次大戦期日本におけるエスペラント運動の実態

1914年8月にヨーロッパで第一次世界大戦がはじまった。そのため、この年パリで開かれる予定であった第10回世界エスペラント大会は中止され、翌1915年、サンフランシスコで第11回大会が開催されたものの、大戦終結までヨーロッパのエスペラント運動は停滞した[25]。加えて、大戦中には、排他的愛国主義が全ての国家社会の一般的ムードになり、エスペランティストたちは分断され、戦争に対しても沈黙を余儀なくされた。

既に述べたように、第一次世界大戦勃発以前から日本のエスペラント運動は急速に衰退していた。1915年頃のエスペラントに対する世評は、「昔、はやったことがあるが、今時そんなものをやる馬鹿はない」[26]といったありさまであった。それ故、この頃の日本のエスペラント運動は、国際的連帯どころか国内的普及もままならない状況に置かれた。日本エスペラント協会も同様で、雑誌の発行は中断し、協会の各機関も一時はほとんど停止状態となった。

1913年に、東京支部の児玉四郎は台北に移住し、同地でエスペラント講習会を始めた。児玉と蘇璧輝（1908年に学習）・連温卿（1913年9月に学習）らは、12月に日本エスペラント協会台湾支部を設立して、実用的方面から台湾知識人階級の間に宣伝を努めた[27]。しかし、当局は「エスペラントはロシアの虚無党が使ったものであるから危険だ」[28]と台湾人エスペランティストへの監視や攻撃を行った。この時期の台湾では、辛亥革命の蜂起が波及し、抗日祖国復帰武装運動事件が頻発し、西来庵事件が勃発した最中であった。このような時代背景もあって、台湾での初期エスペラント普及運動も1915年に挫折した。

前述したように、日本エスペラント協会が率いるエスペラント普及運動は、協会の中心にいた黒板の渡欧、エスペラントの実用性の不足、及び社会主義者との関係などによって、急速に衰退していた。ところが、第一次大戦勃発からしばらく経つと、状況が大きく変化しはじめた。1915年に、千布利雄は各国のエスペランティストに呼びかけて、新聞記事にふさわしい時事問題や論説をエスペラント語に訳してもらい、それをさらに和訳して日本の新聞に供給する通信社設立の計画を立てた。実際、当時の新聞『万朝』、『学生』、『土曜新聞』等に翻訳を送り、それらは掲載されたといわれている[29]。1916年頃には、第一次世界大戦の影響により日本の商品輸出が急増し、大戦景気が始まった。人々は再び目を国外に向け、日本の文化を宣伝しようとした。日本エスペラント

協会の機関誌は、学習研究記事を中心に、年12回の定期的発行をようやくにして実現し、月刊誌として会員の手に届くようになった[30]。日本エスペラント協会の支部が、横須賀、台湾、横浜、大阪、金沢、広島、沖縄に設立され、各地で講習会や例会も開かれ、エスペラント運動は強力な宣伝戦を展開し始めた[31]。特に、4月29-30日、東京では第3回日本エスペラント大会が9年ぶりに開催され、地方会員に大きな刺激を与えた。事実上、この年から協会の会員数は増加しはじめ、エスペラント普及運動はその成長の曙光を見せた。

また、第一次世界大戦終結後、民族自決主義の台頭により、多くのヨーロッパの国々でエスペラントを公用語として採用する動きが胎動し始めた。「独逸の学者や英仏学者間に、いずれの国語にもよらざるこの国際語たるエスペラントをして平和会議の用語とするにしかずと云う議論が専ら宣伝せられている」[32]という観察も示されている。世界各国において、エスペラント運動が活発していった。そこには次のような事情があったと考えられている。

「之れは (1) エスペラントが言語として極めて完全なるものであるので当然の情勢であるのと、(2) 国際連盟其他で列国の国際交渉の頻繁なるため国際語に対する興趣が盛んに＋なり、(3) 無線電信電話の発達に依り科学上の必要から国際共通語の必要を感ずるに至った、等のことに起因する点はあるけれども、又他の一の重要なる原因は実に各国民が自国語に目覚めたる点にある。」[33]

すなわち、大戦後、国際関係がますます緊密化する世界情勢のもとでは、民族自決主義と各国言語への尊重によって、既存の言語を国際語としない方法への関心が高まり、人工的国際語としてのエスペラントへの着目が生まれたのである。こうして、政府からの補助金、種々の国際会議に採用、電信用語に許可などを通じて次第に公に認められ、欧州各地のラジオ放送局より毎日エスペラント放送が聞かれるようになった[34]。日本でもこのような状況のなかで、エスペラントへの関心が再び強まることとなった。ただし、エスペラントの意義をどこに見出すかは立場によって異なった。たとえば、自由主義者たちは西洋新文明の成果としてエスペラントを迎え入れ、ナショナリストたちはヨーロッパの「言語帝国主義」と戦うためにエスペラントに着目し、研究者たちは学問上のコミュニケーションの手段としてエスペラントを使用しようとした。

Ⅳ．1920年代初頭におけるエスペラント運動の広がり

ⅰ.「英語帝国主義」への対抗―北一輝のエスペラント採用論

エスペラントに対するナショナリストの関心の背後にあったのは、特定の言語が持つ抑圧性についての認識でもあった。すなわち、英語その他による「言語帝国主義」の圧迫に対する対抗言語として、エスペラントが位置づけられた。すでに、第一次大戦直後から、このような考え方がうまれた。北一輝の思想がこの考え方を代表する。

1919年に刊行された『国家改造案原理大綱』の第6巻「国民教育の権利」という項目のなかで、北はエスペラントに言及していた。1923年、『国家改造案原理大綱』を『日本改造法案大綱』へと改題した際、北は、教育制度を根本的に改革するために「英語を廃して国際語（エスペラント）を課し第二国語とす」[35]と主張している。北はイギリスの植民地ではない日本の国民が英語を学ぶ必要や義務はないとし、政治的には中立であるエスペラントの「第二国語」化を提唱した。日本はいずれ、極東シベリアからオーストラリアに至る大帝国を建設することになるため、国語に苦しむ国民に「劣悪なる」日本語ではなく、ヨーロッパ起源のエスペラントを推進することが必要だと考えたからであった。北は帝国主義的言語としての英語を排撃し、かつ「劣悪なる」日本語もまた国境を越えた共通言語にはなりえないとし、「大東亜共通語」としてのエスペラントを推進しようとしたのである。

そのような文脈で、国民教育のなかでのエスペラント教育が重視される。北は次のように述べている。

「国民教育の期間を、満六歳より満十六歳までの十か年間とし、男女を同一に教育す。学制を根本的に改革して、十年間を一貫せしめ、日本精華に基づく世界的常識を養成し、国民個々の心身を充実具足せしめ、おのおのその天賦を発揮し得べき基本を作る。英語を廃して国際語(エスペラント)を課し第二国語とす」。

つまり、北は国民教育改革を国家改造の国策とし、それを英語を廃止してエスペラントを採用する案に結びつけていた。

北は続いて、国民教育において英語を廃止する理由を次のように論じている。

「一切にわたりて英語を廃するゆえん。英語は国語教育として必要にもあらず、また義務にもあらず。現代日本の進歩において英語国民が世界的知識の供給者にあらず。また日本人は英語を強制せらるる英領インド人にあらず。英語が日本人の思想に与えつつある害毒は英国人が支那人を亡国民たらしめたるアヘン輸入と同じ。……言語は直ちに思想となり、思想は直ちに支配となる。一英語の能否をもって浮薄軽ちょうなる知識階級なるものをつくり、店頭に書冊に談話にその単語を挿入して、とくとくてんてんとして恥なき国民に何の自主的人格あら

んや。国民教育において英語を全廃すべきはもちろん、特殊の必要なる専攻者を除きて全国より英語を駆逐することは、国家改造が国民精神の成長的躍動たる根本義においてとくに急務なりとす。」[36]

このように北にとっては、英語という言語は帝国主義と表裏一体のものであった。英語を勉強するのはアヘン輸入と同じように日本人の思想に毒害をもたらしている、と北が語っているように、英語の受容は日本の文化的植民地化を意味するものと捉えられた。北の考えでは、言語が思考方法に影響を及ぼし、また思考方法が権力支配に結びつく。それゆえ、英語を受け入れてしまうと、日本人としてのアイデンティティ「自主的人格」を失ってしまう、と北は主張している。こうして「英語廃止」を唱えた北は、日本語もまた国際共通語にはなりえないとして、次のように述べている。

「国際語を第二国語として採用するゆえん。しかしながら実に他の欧米諸国に見ざる国事改良、漢字廃止、言文一致、ローマ字採用等の議論百出に見るごとく、国民全部の大苦悩は日本の言語文字のはなはだしく劣悪なることにある。そのもっと急進的なるローマ字採用を決行するとき、幾分文字の不便はまぬがるべきも、言語の組織そのものが思想の配列表現において、ことごとく心理的法則に背反せることは、英語を訳し漢文を読むにすべて日本文が顛倒して配列せられたるを発見すべし。国語問題は文字または単語のみの問題にあらずして言語の組織根底よりの革命ならざるべからず。しかして不幸なる幸は、中等教育に英語を課し来れる慣習のために、その程度の教育者も被教育者も、何らかの言語を習得すべきことを必然的に確信せることなり。国際語の合理的組織と簡明正確と短日月の修得とは世人の知るごとし。成年者が三月または半年にて足る国際語の修得が。中学程度の児童、一、二年にして完成すべきことは、英語が五年間没頭してなお何の実用に応ずる完成を得ざる比にあらず。児童は国際語をもって国民教育期間中に世界的常識を得べし。しかして欧米の革命的団体は大戦のはるか以前、これをもって国際語とせんと決議せしほどのもの。もっと不便なる国語に苦しむ日本はその苦痛をのがるるために、まず第二国語として並用する時、自然淘汰の理法によりて五十年の後には国民全部がおのずから国際語を第一国語として使用するにいたるべし。したがって今日の日本語は特殊の研究者にとりて梵語、ラテン語の取扱を受くべし。」[37]

ここで北は、「国語問題は文字または単語のみの問題にあらずして言語の組織根底より」日本語が劣位にあることを指摘し、「国際語の合理的組織と簡明正確と短日月の修得」が重要であると述べている。すなわち、北にとって、英語でも日本語でもない言語が必要であると考えられた。そして、エスペラントは「中学程度の児童」でも短期間で習得することができ、これによって世界的情報が得られると言うのである。「自然淘汰の理法」によって劣悪なる日本語も次第に廃除され、「五十年の後には国民全部がおのずから国際語を第一国語として使用する」ことになるのが北の展望であった。エスペラントが第二国語から第一国語に進化するとの主張からみても、北のエスペラントに対する期待が如何に大きかったのかが読み取れるだろう。

さらに北は、現時点で新たな国際語が必要である理由について、次のように述べている。

「国際語の採用がとくに当面に切迫せる必要ありという積極的理由。下掲国家の権利に説くごとく、日本はもっとも近き将来において、極東・シベリア・濠州等をその主権下におくとき、現在の欧米各国語を有する者のほかに、新たにインド人・支那人・朝鮮人の移住を迎うるがゆえに、ほとんど世界すべての言語をわが新領土内に雑用せしめざるべからず。これに対して朝鮮に日本語を強制したるごとく我みずから不便に苦しむ国語を比較的好良なる国語を有する欧人に強制するあたわず。この難問題は実に三、五年の将来に迫れるものなり。主権国民がシベリアにおいて露語を語り、濠州において英語を語る転倒事をなすあたわざるならば、日本領土内に一律なる公語を決定し、彼らが日本人と語るときの彼らの公語たらしめざるべからず。劣悪なる物が亡びて優秀なる者が残存する自然淘汰律は、日本語と国際語の存亡を決するごとく、百年を出でずして、日本領土内の欧州各国語、支那・インド・朝鮮語は、また当然に国際語のために亡ぶべし。言語の統一なくして大領土を有することは、ただ瓦解にいたるまでの槿花一朝の栄のみ。」[38]

北はエスペラントの社会的役割を重視していた。それは、近い将来において極東シベリア、オーストラリアなどを日本の主権の下に置く大帝国が出現し、これらの植民地において統一公用語を決定する必要があるからである。すなわち北は、植民地における言語の統一を主張していた。なぜなら、「主権国民」日本人が植民地になったシベリア・オーストラリアにおいてロシア語や英語を語る事ができないため、「言語の統一なくして大領土を有することは、ただ瓦解に至るまでの槿花一朝の栄のみ」と考えられたからである。新しい大帝国において社会的役割を果たす共通語としてエスペラントに期待が寄せられた。要するに北は、エスペラントの採用こそが、想像の日本大帝国の布石となると考えていたのだろう。

北はザメンホフのように帝国の被支配者としてではなく、自ら帝国を作り上げる支配者の立場からエスペラン

トを採用しようとした。すなわち、北のエスペラント採用論は、「言語の問題だけを論じたものではなく、北が構想した西洋列強を超えるコミュニケーション戦略に密接に結びついていた」と考え方である[39]。しかし、エスペラントを賞賛する北が、実は「どの程度までモノしていたかについては、何の証拠も残っていない」のは皮肉なことである[40]。『反体制エスペラント運動史』のなかで、大島・宮本は、北がエスペラントと結びつきをもった契機として、「堺利彦・大杉栄らと北との交友関係と社会主義の中にその源泉を求めるべき」[41]と推測している。結局、北のエスペラントに関する言説は、自ら学習した経験に基づくものではない可能性が高いと言えよう。ただ英語に対する敵意及び日本語に対する劣等感の裏返し、あるいは、大帝国が出現した後の言語障害を克服するための空想的な議論であったのかもしれない。すなわち、北のエスペラント採用論は、彼が構想した「大東亜共栄圏」における日本の支配を円滑化するためにエスペラントを活用しよう、という提案であった[42]。

ii．社会主義的潮流

1917年にロシアに起こった社会主義革命は、古い体制に対する抵抗運動を色々な分野で力づけたが、エスペラント運動もその例外ではなかった。1919年に、エスペランティストたちにより出されたエスペラントの宣伝ポスターのなかでは、1848年に発表された『共産党宣言』と1887年に発表されたザメンホフの国際補助語案とが以下のように比較されていたのである。

「前者のかかげた要求『万国プロレタリア団結せよ！』は10月革命によって達成されたが、今や解放されたプロレタリアートが、世界中に通ずるプロレタリアートの共通語としてエスペラントを取りあげ、後者の理念も実現させる課題と精力的にとりくむ時が来たのである」[43]。

すなわち、全世界の社会主義者たちは、今後エスペラントを彼らの共通語として利用し、同時に、エスペラントの理念「人類同胞愛」を実現させるという目標を掲げたのである。彼らは、エスペラントに、インターナショナリズムを志向したプロレタリアートの世界規模での相互通信を可能にする役割を期待した。

この時期の日本では、アナキズムやコミュニズムがデモクラシーの高まりのなかで、次第に大衆のなかに根をおろしはじめ、エスペラント運動もまた社会主義者たちの間で急速に広がっていった。その頃のエスペラント運動について秋田雨雀は次のように述べている。

「大正八（一九一九）年ごろの日本のエスペラント運動は、わが国の『ナロードニキ』の時代であったと思う。ワシリー・エロシェンコを中心に、われわれエスペランティストはよく集まった。『十月の嵐』が世界に吹きまくっていたが、わが国の文学はまだ人道主義の温床の中に眠っていた。しかし『十月の嵐』は、わが国の働く人々の上に十分の影響を持っていた。第一回のメーデーの示威運動が行われ、エロシェンコをはじめ多くのエスペランティストがこの示威行例に参加していた。」[44]

エロシェンコは盲目の詩人、童話作家であり、日本と中国のエスペラントの普及に大きな役割を果たした熱心なエスペランティストである。エロシェンコは1890年、ウクナイナのアブホーフカ村の中農の子として生まれ、4歳の時に失明、モスクワの盲人学校を1906年に卒業し、ロンドンの王立盲人音楽学校でバイオリンを学んだ。1910年にロンドンに住む亡命アナキスト、ピョートル・クロポトキンと会ってもいるが、この時代のエロシェンコの考えは単なるヒューマニズムしかなかった[45]。エロシェンコが社会主義的傾向を示し始めたのは、1914年、東京に来てから後のことである。

エロシェンコは、24歳で初めて日本に渡ってきてから31歳で日本を追放されるまでの間に、多くの日本人と交流した。エロシェンコを日本に送り出したのはモスクワのエスペランティスト・グループで、その目的は、盲目のかれを日本の盲学校で学ばせて、生計の道を立てさせようということであったと言われている[46]。そして、彼は東京に来てから日本語も着実に学び、一年間で、日本語も相当巧みに話せるようになった。また、身元引き受け人の中央気象台台長の中村精男博士の紹介で、エロシェンコは盲学校の特別研究生になった。さらに、彼は盲学校関係者との交流にとどまらず、黒板を訪れ、日本のエスペランティストの中に入っていった。

エロシェンコは日本での２年の生活を経た後、タイ、ミャンマ、インドなどで３年間を過ごした。その渡航の目的は、これらの国に盲学校を建てることであった。しかし1919年、危険人物としてインドから追放されて再び日本に帰ることを余儀なくされた。ちょうどこの頃、社会主義の研究が日本で大いに盛んになり、エスペランティストの多くがこの運動に参加し、エロシェンコも、そうした人たちと深く関わりを持つようになった。彼を新宿中村屋[47]に連れてきたのは、秋田雨雀と神近市子だった。

秋田の父も盲人であるため、彼はエロシェンコに特別の親しみを抱き、エスペランティストになったという。こうして、エロシェンコは秋田を通じて、大杉栄、神近市子などと知り合い、社会主義者との接触も広がっていった。「かれを社会主義者にしたのは、直接には高津正道、小野兼次郎、福田国太郎、神近市子、さらに大杉栄たちであった」[48]、と言われている。さらに、「すべて

の社会主義者はエスペランチストであるべきだ。またすべてのエスペランチストは社会主義者であるべきだ」というエロシェンコの言葉は、新人会の会員で後に農民運動家となる河合秀夫のような人たちに大きな影響を与えた[49]。

結局、1921年5月、エロシェンコはボルシェヴィズムを宣伝する危険な人物として、新宿中村屋の二階から引きずり出されて日本から追放された。

なお、エロシェンコが追放されたこの時期に、反戦平和、第三インターナショナル支持を公然と訴えた小牧近江らは、「行動と批判」をスローガンとして掲げて、10月に雑誌『種蒔く人』を発行した[50]。『種蒔く人』では、表紙にエスペラントの雑誌名をつけ、革命的エスペラント運動の紹介記事を盛んに掲載していた。また、種蒔き社の主催により講習会を開き、大阪・秋田の文芸講演会では、「世界主義とエスペラント」というテーマで宣伝活動を熱心に行った[51]。

たとえば、その創刊号では「エスペラント」か「イド」[52]かをめぐり、どちらを国際語として選択するかが議論され、「僕たちはブルジョアでない方の国際語を選びたい」[53]と記された。また、第2号に掲載された「エスペラント大会と階級闘争」のなかではプラハで開かれた第一回世界労働者エスペランティスト大会を紹介し、第3号にある「第三インターナショナルと万国語」のなかでは、モスクワの会議で取り上げられた「万国共産党と万国語問題」などの議論状況を掲載した。要するに、この雑誌では、第三インターナショナルとエスペラントのかかわりについて頻繁に論じられたのである[54]。

したがって、この時期における国際語問題と国際的階級闘争、民族解放運動などとの結合は、日本における社会主義者間のエスペラント運動の発展を推し進めたと言えよう。

ⅲ．自由主義的潮流

1916年は、第三回日本エスペラント大会が9年ぶりに開催され、日本におけるエスペラント運動成長の曙光を見せていた時期にあたった。ちょうどこの頃は、大正デモクラシーの最盛期でもあった。大正デモクラシーの理論的な指導者といわれる政治学者・吉野作造(1878～1933)は、言論の自由と普通選挙に支えられた議会政治を強く求めたことで知られている。さらに、エスペラント関係者の間において、吉野はエスペランティストとして有名であった[55]。

1919年、吉野が再びエスペラントへ関心を持ったのは、三・一運動を契機とする朝鮮統治政策への批判、中国の五・四運動の擁護という政治的背景があったからと言えよう。吉野の中国論と朝鮮論は既に1916年を境に劇的な変化を見せたと言われる[56]。1919年のパリ平和会議を契機とする反帝国主義・反封建主義の五．四運動や三．一運動への共感を表明した吉野は、東アジアの共同提携と社会改造運動を主張した。第一次世界大戦後の吉野の言論活動の一つのポイントである「国際平等主義の確立のための努力」は、具体的には朝鮮・中国の被圧迫諸民族のナショナリズムに対し、日本の国民の眼を開かせることであった[57]。このような時代背景もあったように、吉野はエスペラントを通じて国境を超えた東アジアにおける地域連携を期待したと思われる。すなわち、エスペラント運動による東アジア連帯のインターナショナリズムの志向を吉野から読み取ることができる。こうして、吉野が指導した大正デモクラシーの潮流とエスペラント運動の高まりは緊密に結びついていくことになる。

たとえば、吉野から思想的影響を受けた当時の新人会が最初に出した雑誌『デモクラシー』は、扉にルソー、トルストイ、マルクス、クロポトキン、リンカーン、ローザ・ルクセンブルクとならんで、ザメンホフの肖像を載せ、エスペラント関係の記事を掲載した。1919年10月12日に刊行された第7号に掲載された山崎一雄の「ザメンホフ博士とエスペラント」では、エスペラントを通して世界の民族が手を取り合って平和な社会を実現しよう、との主張が展開されている[58]。こうして、初期の学生運動にエスペラントを広がっていった。

彼らが次に発刊した雑誌『先駆』(1920年)には、「ラ・ピオニーロ」(La Pioniro)というエスペラントのサブタイトルがつけられていた。また、吉野が唱えた民本主義に影響された学生らは、日本各地の学校でエスペラント会をつくり、エスペラント運動を盛り上げていった。こうした流れのなかで、1922年には、東京学生エスペラント連盟(15校)、京都学生エスペラント連盟(9校)、名古屋学生エスペラント連盟(4校)が相次いで結成され、学校でのエスペラント熱は一層高まった[59]。

他方で、国際協調のための機関として設立された国際連盟に期待し、そこに活動の場を見出していったリベラルな国際主義者たちも、エスペラントに好意的な姿勢を示した。新渡戸稲造はその一人である。

新渡戸は、吉野が設立した黎明会に参加しており、大正デモクラシーの実践者の一人でもあった。新渡戸は『実業之日本』誌に、毎月のようにデモクラシーに関する評論を発表している。1919年1月1日号「デモクラシーの根抵的意義」、2月1日号「デモクラシーの要素」、3月15日号「デモクラシーの主張する平等論の本旨」、5月1日号「平民道」と矢継ぎ早に執筆している。この年の6月末には、新渡戸はベルサイユ平和会議出席のため

にパリにやってきた西園寺公望全権団に会い、国際連盟の事務次長に推薦され、この誘いを受け、1920年から1926年にかけてジュネーブに駐在していた。

さて、新渡戸とエスペラントとの出会いは、ジュネーブだと思われる。当時、日本エスペラント学会の宣伝部員で、国際連盟の情報部で働いていた藤沢親雄は、国際連盟を通じてエスペラントの振興をはかるという目的を持っていたため、新渡戸に接近したと考えられる[60]。さらに、新渡戸は、元々ポーランドに関心を抱いていて[61]、同じ言葉を用いることで異なる民族の間に相互の思想が行き来しうると考えたザメンホフの理想に魅了され、エスペラント語に興味を抱くに至ったのである。

また、新渡戸の活動の舞台となった国際連盟では、エスペラントの問題が注目を浴びていた。国際的紛争を解決する手段としてエスペラントを学校に導入する提案である[62]。結局、1920年の国際連盟総会で、フランス代表の激しい抗議により、エスペラントを作業言語として採択する案は否決された。それにもかかわらず、1921年7月にチェコのプラハで開催された第13回世界エスペラント大会に国際連盟を代表して出席した新渡戸は、労働者たちが熱っぽくエスペラント運動に参加していることに心を打たれ、その印象について国際連盟に積極的な報告を提出した。

「富みかつ教養のある人たちが文学作品や科学論文を原語で読むことができるのに対し、貧しくて身分の低い人たちはエスペラントをお互いの意見を交換する共通語にしている。こうしてエスペラントは国際的民主主義と強力な結合のモーターになりつつある。この共通語問題を研究するにあたって、合理的かつ同情のある精神で大衆のこの利益を考慮に入れる必要がある。」[63]

すなわち、新渡戸は、言語による不平等が人々の相互理解を妨げると認識し、エスペラントに依頼すれば弱者の側に国際民主主義が広められるのではないか、と期待したようである。彼はエスペラントを国際交流のための有効手段として擁護する立場を取ったのである。戦後処理のため設立された国際連盟で働いていた新渡戸は、英語やフランス語の圧倒的な国際的影響力が英仏の植民地主義や大国の権威に支えられており、弱小国に不利になると認識し、エスペラントを擁護する発言をしたのであろう。

1922年、国際連盟は、新渡戸の報告書に基づき、「エスペラントを学校で教える問題を国際連盟知的協力委員会にまわし、委員会に世界語問題のいろいろな面について意見を述べてもらう」と決定した[64]。しかし、その後、国際連盟の国際知的協力委員会でこの問題が討議されたが、再びフランスから加えられた政治的圧力と知識人の偏見も合わさって、結果的にエスペラントが教育現場で採用されることにはならなかった。これに対して、新渡戸は「私はエスペラント語は知らない。したがってこれがいいか悪いかはよく分からない。しかし、エスペラント語が非常な勢いで普及しつつあるという事実は認める。これがもし、二十、三十年後になって、エスペラント語が国際語となって採択されるようになったとき、葬り去った貴方たちが恥をかかないか」[65]とコメントし、委員会の否決を惜しんでいる。要するに、新渡戸はエスペラント語を習得しなかったが、「国際人としての立場」[66]からエスペラントの活用を推進していた。新渡戸のようなリベラルなインターナショナリズムの立場は、日本エスペラント運動の一つの特徴であった。

さらに、エスペラント普及運動の擁護者としての新渡戸の活動は、日本にも伝わってきた。彼に影響された一人が、エスペラント学会員の小坂狷二である。当時の日本を代表する総合雑誌『改造』がエスペラント特集号を組み（1922年8月号）、同年9月から12月にかけて、小坂によるエスペラント語講座が連載された。後に小坂は、「日本エスペラント運動の父」と称されるようになった[67]。こうして、大正デモクラシーや民族自決主義の潮流に乗って登場したインテリ層の間に、エスペラント熱が浸透し、新聞や雑誌はエスペラントついての文章も多く掲載するようになったのである。

Ⅴ．おわりに

本稿では、20世紀初頭における日本のエスペラント運動に着目し、エスペランティストが歩んだ歴史と、その特徴を取り上げ考察してきた。この時代において、エスペランティストとエスペラント運動は、その発展と挫折が合わさった複雑な様相を呈した。

日露戦争前後、日本の国際化傾向がますます増進した状況のなかで、言語レベルでの障害を克服するために、知識層は国際補助語としてのエスペラントに関心を持った。そのなかには、非政治的なスタンスをとるエスペランティストも政治的な立場を明確したエスペランティストもいた。しかし、政治との距離の相違を超えて彼らに共通していたのは、エスペラントの実利的有用性への関心だった。それは、ザメンホフのいうエスペラントの内在的思想―「同胞愛と正義」―を十分に理解・受容していなかったということでもあった。新文明として輸入された初期のエスペラント運動が一時的なものに終わったのは、当時の組織活動の不十分さと同時に、エスペラントの理念に対する認識の希薄さにも起因していた。

第一次大戦期に入る前、すでに初期エスペラント運動は急速に衰退していた。大戦中に排他的愛国主義がすべ

ての国家・社会の一般的ムードの下で、日本のエスペランティストも戦争に対して沈黙したことが考えられる。千布利雄のようなエスペランティストが、日本軍の青島占領に際し協会機関紙JEに「Banzai!」なる記事を掲載すること例外に属する。

しかし、ロシア革命、第一次世界大戦の終結を経て、社会主義の高揚と国際秩序の再編成及び民族自決主義の台頭によりエスペラント運動は再び脚光を浴びながら成長した。この時期のエスペラント運動は、当時の様々な社会運動や政治運動と結びつきながら受容されていった。その主たる潮流は、純粋な言語運動を目指す日本エスペラント協会から移行した日本エスペラント学会のような中立的主義の流れ、大正デモクラシーに活躍した吉野作造及び国際連盟に派遣された新渡戸稲造のような自由主義者の流れ、インターナショナリズムを志向した社会主義者の流れなどである。興味深いのは、1920年代に入って北のようなナショナリストもエスペラントに注意を払った。これらのエスペランティストたちは、それぞれ自分なりの思想的立場や政治的立場からエスペラントを彼らの目的を達成する道具として活用しようとした。つまり、この段階までのエスペラントの最大の意義は、エスペラントが国際的連帯を繋ぐ一つの手段として、実用主義的観点から言語（国語）という障害を克服することに求められた。こうしたエスペラント運動の多様性は、同じ「エスペラント使用の推進」という共通の主張を掲げながら、実際には1920年代半ば頃のエスペラント運動間の分化を引き起こすことにもなったのである。

---

[1] ザメンホフについて、Aleksander Korzhenkov. *The Life of Zamenhof.* NewYork：Mondial, 2010参照.

[2] 宮本正男『宮本正男作品集2』日本エスペラント図書刊行会、1988年、77－78頁。

[3] 大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』三省堂、1987年。初芝武美『日本エスペラント運動史』日本エスペラント学会、1998年。ウルリッヒ・リンス著・栗栖継訳『危険な言語—迫害のなかのエスペラント—』岩波新書、1975年。

[4] 田中克彦『エスペラント—異端の言語』岩波新書、2007年。山本真弓[編著]・臼井裕之・木村護郎クリストフ『言語的近代を超えて：＜多言語状況＞を生きるために』明石書店、2004年。臼井裕之「北一輝の＜エスペラント採用論＞に見る近代日本の＜英語問題＞＜国語問題＞」日本コミュニケーション学会、2007年等を参照。

[5] ユンジヨン「1930年代の日本のエスペラント運動と国際関係」『相関社会科学』、2009年。三宅栄治『闘うエスペランチストの軌跡—プロレタリア・エスペラント運動の研究』リベーロイ社、1995年。竹内次郎「プロレタリア、エスペラント運動について」『社会問題資料叢書』東洋文化社、1978年。

[6] ヴォラピュク(Volapük)は1879年もしくは1880年にドイツのヨハン・シュライヤーにより創られた人工言語である。

[7] 日本エスペラント運動50周年記念行事委員会『日本エスペラント運動史料』日本エスペラント学会、1956年、4頁。

[8] 初芝武美『日本エスペラント運動史』日本エスペラント学会、1988年、20頁。

[9] 「日本エスペラント協会」『*LA JAPANA ESPERANTISTO*』第1巻第1号、1906年、2頁。

[10] 同上。

[11] 藤間常太郎「我国エスペラント移入の三系統」『*LA REVUO ORIENTA*』第6月号、1936年、3－6頁。

[12] ミスレル（Alphonse　Mistler）はフランス人宣教師。1893年長崎に来て、1903年に同地の海星中学物理化学の教師となり、1906年9月には東京暁星中学に転じ、1913年に再び海星中学に戻り、33年に辞して後は横浜のSt.Joseph's Collegeでフランス語を教えていた。藤間、前掲記事、3頁。

[13] 黒板勝美（1874～1946）東京帝国大学教授、歴史学者、文学博士。1902年英字新聞からエスペラントを知り、1903年エスペラント学習書を取り寄せ学習しはじめた。「極めて便利なエスペラントなるものができたのである」と述べ、世界に通用する言葉の要求を提出している。

[14] 前掲書『日本エスペラント運動史料』、1956年、7頁。

[15] 堺利彦「エスペラント語の話」『直言』労働運動史研究会編、復刻版、1960年、51頁。

[16] 前掲書『日本エスペラント運動史料』、1956年、7頁。

[17] 藤間、前掲記事、6頁。

[18] 福田国太郎（1886～1940）鳥取県出身、アナキスト・エスペラント運動家。全文エスペラントの文芸誌「Verda　Utopio」（緑のユートピア）を発行。関西エスペラント運動の土台をつくる。—日本アナキズム運動人名事典を参考。
安孫子貞次郎（生没年未詳）、小森和子の実父、有楽社支配人。
武藤於菟（1876～1942）鉄道技師。
浅田栄次（1865～1914）徳山藩の家に生まれ、東京外国語大学教授・日本の英語学者。

高橋邦太郎（1898～1984）東京生まれ、翻訳家、比較文学・日仏文化交流研究者。

[19] 二葉亭四迷（1864～1909）小説家・翻訳家。エスペラントに関して、1906年7月から10月までの短期間に集中し五つの著作を発表している。

[20] 長谷川二葉亭著『世界語』東京彩雲閣、1906年、1-2頁。

[21] 同上、2頁。

[22] 初芝、前掲書、27頁。

[23] 前掲書『日本エスペラント運動史料』、1956年、15頁。

[24] ウルリッヒ・リンス著（栗栖継訳）『危険な言語—迫害のなかのエスペラント—』岩波書店、1975年、99頁。

[25] 初芝、前掲書、34頁。

[26] 前掲書『日本エスペラント運動史料』、1956年、28頁。

[27] 連温卿「台湾エスペラント運動の回顧」『*La REVUO ORIENTA*』1936年、255－256頁。

[28] 同上、256頁。

[29] 前掲書『日本エスペラント運動史料』、1956年、26頁

[30] 初芝、前掲書、35頁。

[31] 前掲書『日本エスペラント運動史料』、1956年、28～31頁。

[32] 岡村民夫・佐藤竜一『柳田国男・新渡戸稲造・宮沢賢治—エスペラントをめぐって—』日本エスペラント学会、2010年、52頁。

[33] 安武直夫「我が文化の為めに」『*La REVUO ORIENTA*』 第1号、1928年、1－2頁。

[34] 伊藤己酉三「宣言—初期エスペラント運動史—6」『*La REVUO ORIENTA*』1933年、28頁。

[35] 北一輝『北一輝著作集』みすず書房、1956年、321頁。

[36] 同上、322-323頁。

[37] 同上、323頁。

[38] 同上、323-324頁。

[39] 臼井裕之「北一輝の＜エスペラント採用論＞に見る近代日本の＜英語問題＞＜国語問題＞」『日本コミュニケーション学会』Vol.20、2007年、62頁。

[40] 大島・宮本、前掲書、56頁。

[41] 同上、55頁。

[42] 山本・臼井・木村、前掲書、265－269頁。

[43] ウルリッヒ・リンス著・栗栖継(訳)、前掲書、130頁。

[44] 大島・宮本、前掲書、161頁。

[45] 同上、125頁。

[46] 田中克彦『エスペラント—異端の言語』岩波新書、2007年、133-134頁。

[47] 当時中村屋には多くの芸術家や文化人が集まっていた。この交友の世界は、後に「中村屋サロン」とも称される。

[48] 同上、125頁。

[49] 河合秀夫「エロシェンコの思い出」『図説国民の歴史』日本近代史研究会編、国文社、第12巻、1964年、105頁。

[50] 小牧近江(1894—1978)：社会運動家、翻訳家。21年友人金子洋文らと秋田県土崎港で第1次『種蒔く人』を創刊し、翌年から東京で第2次を刊行。のちの『文芸戦線』とともに初期のプロレタリア文化運動に大きな役割を果たす。柴田厳・後藤斉編『日本エスペラント運動人名事典』、ひつじ書房(2013)参考、210頁。

[51] 大島・宮本、前掲書、137頁。

[52] イド(IDO)は人工言語の一種である。エスペラントの改修案として1907年に発表されたものである。

[53] 「エスペラントかイドか」『種蒔く人』種蒔き社、第1巻第1号、1921年、50-51頁。

[54] 「エスペラント大会と階級闘争」『種蒔く人』種蒔き社、第1巻第2号、1921年、117頁。「第三インターナショナルと万国語」『種蒔く人』種蒔き社、第1巻第3号、1921年、192頁。

[55] 吉野は、1919年5月、帝大エスペラント会主催の普及講演会で「エスペラントと私」と題して演説し、20年にはエスペラント学会の評議員になった。 柴田・後藤、前掲書参考、544頁。

[56] 吉野の中国論転換の契機は、中国革命史研究と情報提供者・革命志士たちとの交流である。また在日朝鮮留学生たちとの交流が吉野の朝鮮論を転換させた。

[57] 松尾尊兊「解説」『近代日本思想大系17　吉野作造』筑摩書房、1976年、478～479頁。

[58] 山崎一雄「ザメンホフ博士とエスペラント」『デモクラシー』法政大学大原社会問題研究所、復刻版、14頁。

[59] 初芝、前掲書、56頁。

[60] 岡村・佐藤、前掲書、5-6頁。

[61] 同上、38頁。

[62] ウルリッヒ、前掲書、17頁。

[63] 同上、19頁。

[64] 「知的協力委員会」は国際的連帯心を養うために設置された。

[65] 岡村・佐藤、前掲書、40頁。

[66] 新渡戸は「自分はコスモポリタン（世界人）ではなく国民であることを告白する。しかし現代においてよき国民は国際人でなくてはならぬ」との立場を主張している。石黒修「エスペラントの援護者—新渡戸稲造博士—」『*La REVUO ORIENTA*』、第12号、1933年、11頁。

[67] 小坂狷二について、柴田・後藤、前掲書、118－119頁参照。

参考文献

臼井裕之「北一輝の＜エスペラント採用論＞に見る近代日本の＜英語問題＞＜国語問題＞」『日本コミュニケーション学会』Vol.20、2007年。
臼井裕之・木村護郎クリストフ『言語的近代を超えて—＜多言語状況＞を生きるために—』明石ライブラリー、2004年。
ウルリッヒ・リンス著（栗栖継訳）『危険な言語—迫害のなかのエスペラント—』岩波書店、1975年。
大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』三省堂、1987年。
岡村民夫・佐藤竜一『柳田国男・新渡戸稲造・宮沢賢治—エスペラントをめぐって—』日本エスペラント学会、2010年。
河合秀夫「エロシェンコの思い出」『図説国民の歴史』日本近代史研究会編、国文社、第12巻、1964年。
川原次吉郎『エスペラント概論』エスペラント同人社、1923年。
北一輝『北一輝著作集』みすず書房、1956年。
堺利彦「エスペラント語の話」『直言』労働運動史研究会編、復刻版、1960年。
竹内次郎「プロレタリア・エスペラント運動について」社会問題資料研究会編『社会問題資料叢書』第1輯、東洋文化社、1978年。
田中克彦『エスペラント：異端の言語』岩波新書、2007年。
日本エスペラント運動50周年記念行事委員会『日本エスペラント運動史料』日本エスペラント学会、1956年。
日本エスペラント協会編『*LA JAPANA ESPERANTISTO*』第1巻第1号～第8号。
日本エスペラント学会編『*La REVUO ORIENTA*』、1922～1941年。
長谷川二葉亭著『世界語』東京彩雲閣、1906年。
初芝武美『日本エスペラント運動史』日本エスペラント学会、1988年。
松尾尊兊「解説」『近代日本思想大系17　吉野作造』筑摩書房、1976年。
三宅栄治『闘うエスペランティストたちの軌跡—プロレタリア・エスペラント運動の研究』リベーロイ叢書Ⅰ、1995年。
宮本正男『宮本正男作品集2』日本エスペラント図書刊行会、1988年。
ユンジョン「1930年代の日本のエスペラント運動と国際関係」2009年。
*Lazaro Ludviko Zamenhof*著・水野義明訳『国際共通語の思想—エスペラントの創始者　ザメンホフ論説集』新泉社、1997年。
Aleksander Korzhenkov. *The Life of Zamenhof*. NewYork：Mondial, 2010

The Japanese Esperanto Movement in Early 20th Century: Towards International Solidarity

May Tan

This paper attempts to describe the ways in which the Esperanto movement in the early twentieth century Japan aimed at achieving a broadly-defined international solidarity. Esperanto is a planned language that was designed as a medium for advancing intercultural communication and understanding, but at the same the movement concerned with it gave high importance to the concept of an ethnic group, in a nationalistic manner. In Japan, Esperanto achieved popularity after the Russo-Japanese War in 1904-05, because of the development of Japan's international relations. At the beginning of this period, some intellectuals-positively aimed to assimilate European culture and at the same time spread Japanese tradition and culture overseas, therefore they had an interest in Esperanto as an international language.

This study reveals that what made the Esperantists come together, despite their political differences, was an interest in the pragmatic usefulness of Esperanto. However, there appeared clearly different political tendencies amony them, Which led to three groups in the Japanese Esperanto movement in early 1920s, including some people who promoted Esperanto but did not practice it themselves. This paper aims to reveal why in the period immediately after the First World War these intellectuals attempted to adopt Esperanto, how Esperanto could be used for political purposes, and how Japanese Esperantists promoted international solidarity in a world where socialism and nationalism were on the rise.

This paper explores some reasons and back ground of a growing Japanese Esperanto movement in the early twentieth century and the way in which Japanese Esperanto movement has oscillated between internationalism and nationalism.